

第 30 回「整形・災害外科 優秀論文賞」のお知らせ

本誌編集委員会では、昨年一年間の本誌に掲載された投稿論文（論究・臨床・手術・経験・症例欄等掲載論文）を対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記の論文が小誌における 2025 年（整形・災害外科 第 68 巻）の優秀論文に決定いたしました。

**橈骨遠位端骨折に対する積極的徒手整復と背屈位ギプス固定による
保存療法の治療成績**

小関和彦（泉整形外科病院）

〔整・災外 68：279—284, 2025〕（3 号）

**大腿骨近位部骨折症例における受傷前の
ロコモティブシンドロームとフレイルの関係性**

田中暢一ほか（ベルランド総合病院，理学療法室）

〔整・災外 68：821—829, 2025〕（7 号）

選 者 評

本誌第 68 巻（2025 年）に掲載された投稿論文の中から、編集主幹 5 名の厳正な選考により、以下の 2 編が優秀論文として選出されました。

小関和彦氏の論文は、転位のある橈骨遠位端骨折 38 例に対し、積極的な徒手整復と背屈位ギプス固定を用いた保存療法の治療成績を調査したものです。X 線パラメータ（PT, UV, RI）は最終観察時まで良好な値を維持していました。昨今、同骨折の転位例に対しては早期に手術を選択する傾向が強まっていますが、本研究は、適応を精査し的確な整復・固定を行えば、保存療法でも十分な成績が得られることを示した極めて意義深い報告です。

田中暢一氏らの論文は、後期高齢者の大腿骨近位部骨折患者 189 例を対象に、受傷前のロコモとフレイルの関連性を調査したものです。解析の結果、対象の 86.8%がロコモ、59.3%がフレイルに該当し、特にロコモ度が進行した症例ほどフレイルを併発している実態が明らかとなりました。骨折予防において、受傷前からの包括的評価と多職種介入の重要性を改めて示唆しています。

上記 2 編はいずれも臨床上の知見に富み極めて興味深い内容であり、優秀論文に相応しいものと考えます。受賞者の皆様の益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

受賞のことば

この度は、「第30回 整形・災害外科 優秀論文賞」に選出していただき、大変光栄に存じます。近年は転位のある橈骨遠位端骨折に対して、徒手整復を試みずに手術療法一択の整形外科医が増えていますが、適応症例を選択すれば保存療法の成績も決して悪くないので、もっと保存療法に目を向けていただければという思いです。どのような骨折型が保存療法の適応になるかは、本誌68巻10号1233-1238に掲載していただいております。徒手整復は、骨折を整復する、という整形外科医の基本手技であり、徒手整復のレベルが向上すれば、手術時の骨折の整復もより容易となるため、手術治療成績の向上にもつながります。皆様の日常診療に少しでもお役立てになれば幸いです。



小関和彦（泉整形外科病院）

このたびは「第30回 整形・災害外科 優秀論文賞」という荣誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。本研究は、大腿骨近位部骨折の背景にあるロコモティブシンドロームとフレイルの関係性に着目し、受傷前の状態を包括的に評価することの重要性を示しました。骨折は突然起こる出来事のように見えますが、その多くは受傷前からの身体機能や栄養、認知機能の変化が積み重なった結果であると考えています。本研究が、骨折後の対応だけでなく「骨折を起こさせない」ための多職種連携による早期介入の必要性を再認識する一助となれば幸いです。今後も臨床現場からエビデンスを発信し、二次骨折予防の発展に貢献してまいります。



田中暢一（ベルランド総合病院、理学療法室）

優秀論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。

本誌編集委員会では今後も継続的に各年毎の掲載投稿論文を対象に「整形・災害外科 優秀論文賞」の選考を行ってまいります。読者の皆様の活発な研究発表の場として、小誌を存分にご活用ください。

（整形・災害外科 編集室）